

# 肝細胞癌塞栓術後の 肝膿瘍様病変

—ドレナージなどの介入は必要か？—

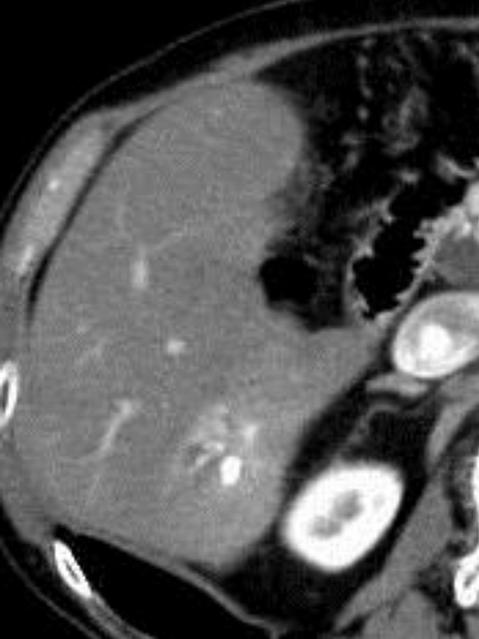
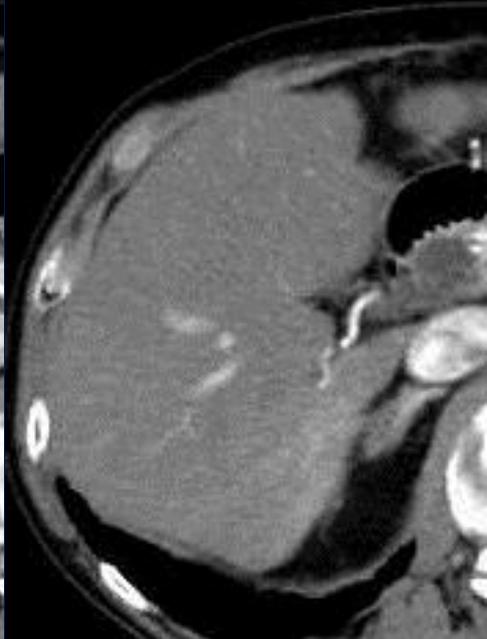
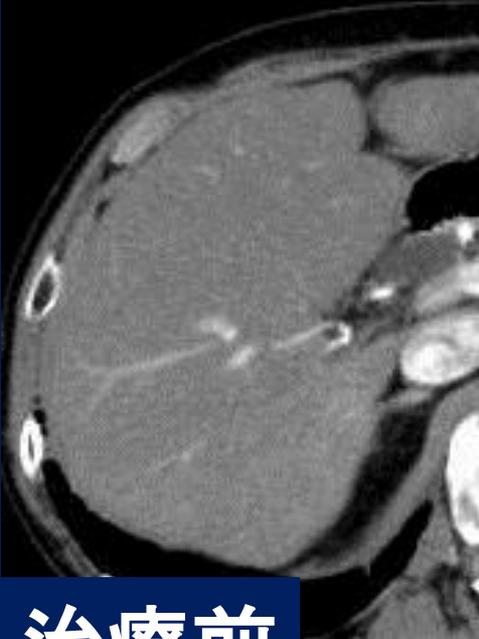
栃木県立がんセンター  
放射線診断部IVR科  
山本孝信

# 症例1

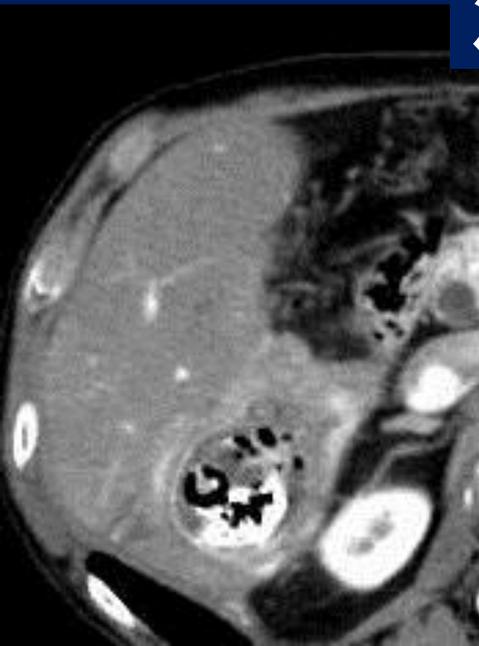
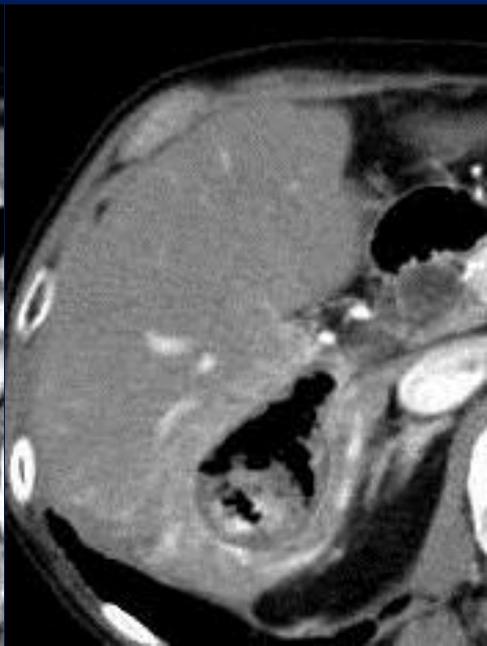
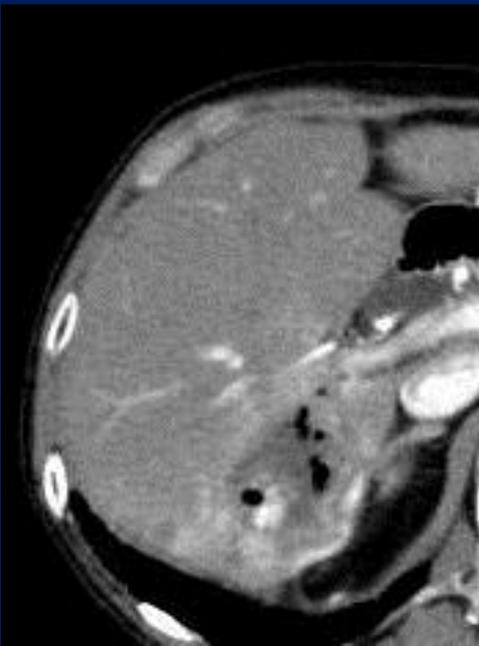
- ・70歳代男性
- ・S6の肝細胞癌に対して塞栓術施行
- ・治療1か月後のCTで肝膿瘍様病変を認める
- ・WBC上昇なし
- ・発熱なし

# 経過-症例1

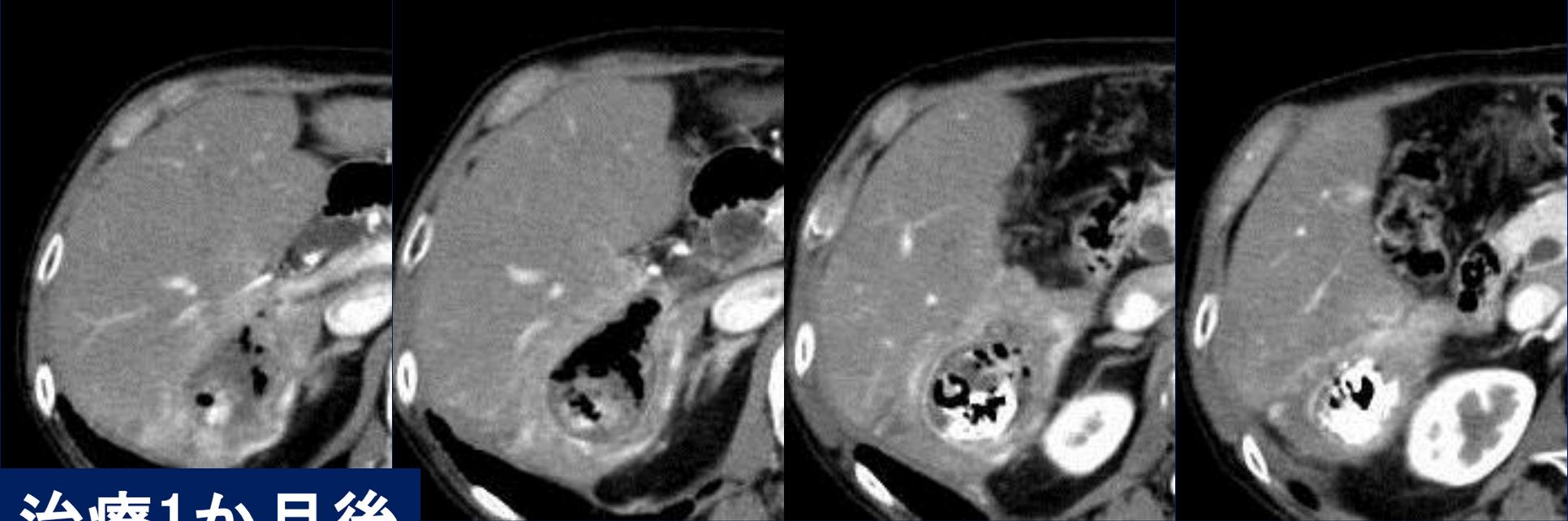
- ・WBC上昇なく、発熱もないため無治療で外来経過観察となる。
- ・治療4か月後のCTで肝膿瘍様病変は消失。
- ・経過観察中のWBC上昇なし
- ・経過観察中の発熱なし



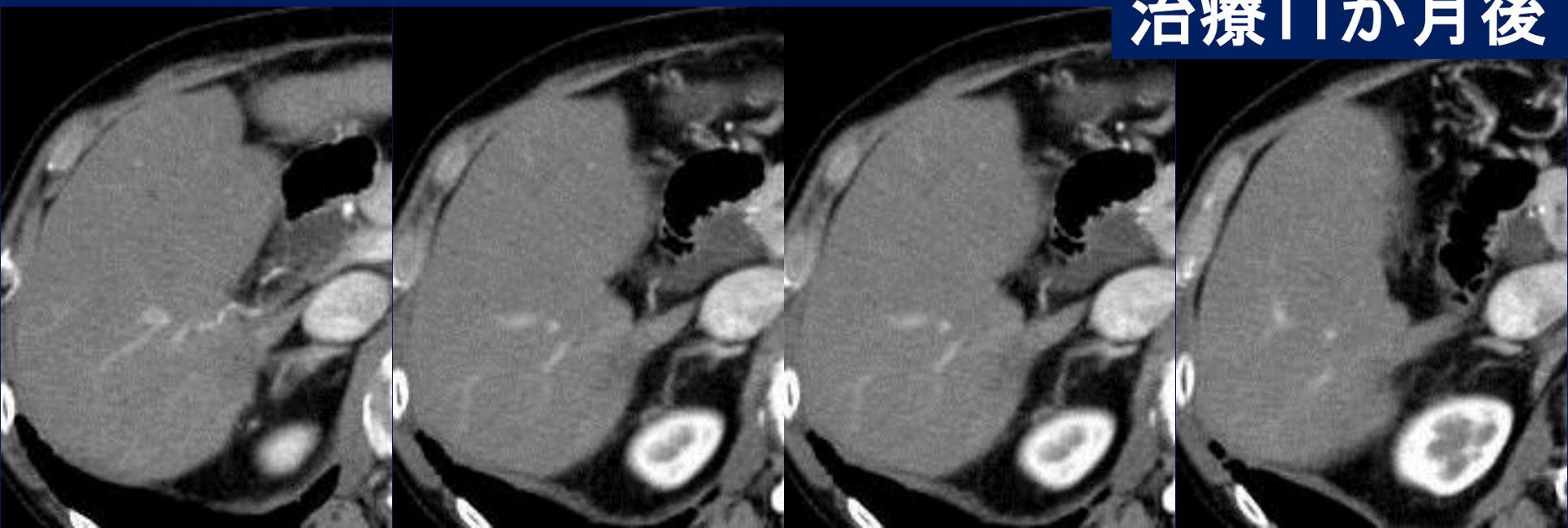
治療前



治療1か月後



治療1か月後



治療11か月後

# 症例2

- ・70歳代男性
- ・多発肝細胞癌に対して塞栓術施行
- ・治療1か月後のCTで肝膿瘍様病変を認める。
- ・WBC上昇なし
- ・発熱なし

# 経過-症例2

- ・WBC上昇なく、発熱もないが、7日間の経口抗生剤で外来経過観察となる
- ・治療2か月後に発熱のため来院
- ・WBC上昇なし
- ・39度台の発熱あり

# 経過-症例2

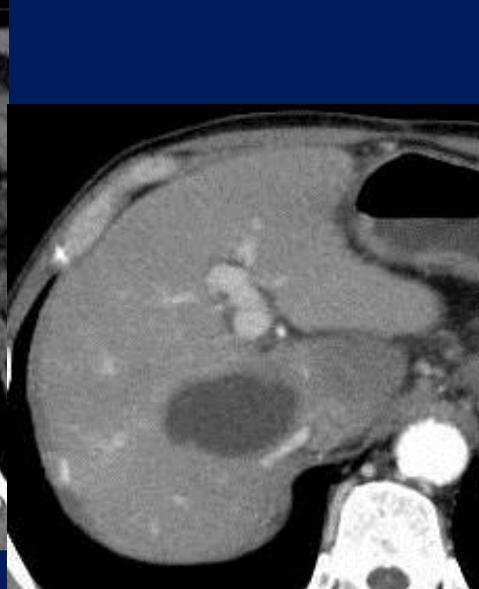
- ・緊急CTで肝膿瘍様病変は増悪
- ・経皮的ドレナージ施行
- ・穿刺排液は膿汁
- ・10日間の抗生剤の点滴静注



治療前



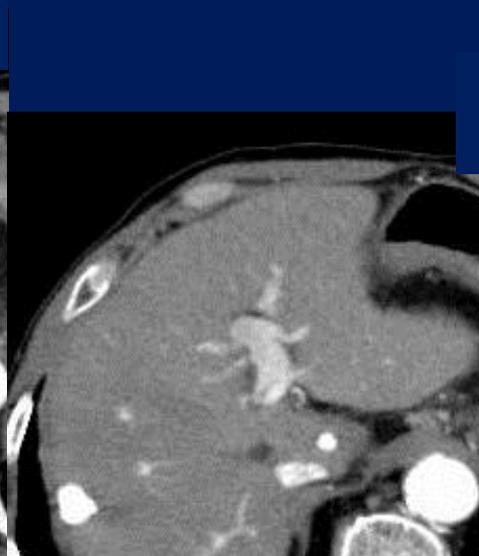
治療1か月後



治療2か月後



治療9か月後



# 考察

塞栓術後のガス産生は、

- ・網状赤血球の嫌氣的代謝による二酸化炭素産生
  - ・酸化ヘモグロビンからの酸素遊離
- によるものと推測されている。

肝細胞癌動脈塞栓術後の腫瘍内ガス産生について  
日本医学放射線学会雑誌. 41 (3) p187-p193

# 結語

塞栓術後のガス産生は、  
臨床的に膿瘍を示唆する所見が  
なければ、ドレナージなどの  
特別な介入なしに消失する  
可能性がある。